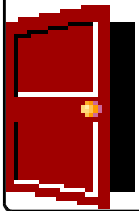


令和5年度《昨年度に続き、今年度も読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

N o 83

桑村小学校令和6年1月25日 文責 渡邊

「自律のために親ができること」これがなかなか難しい!!

今回の読書通信は、『麴町中学校の型破り校長 非常識な教え』（工藤勇一著 SBクリエイティブ 2019年9月）の第四章「『子どものために』を疑う 自律のために親ができること」から、小タイトル「子ども同士のいざこざを仲裁していませんか？」をもとに、子育てについて考えてみたいと思います。いよいよこの著書についての最終回です。

親の役割は、子どもを引っ張り上げて親がいないと何もできない子に育てることではなく、一人で生きていける知恵を授けること。あるいは、その環境を与えていくこと。たとえそれができなくても、せめて一人で生きていける知恵を得る機会を奪わないことが大切だと思います。

では、子どもの自律を育むために、周囲の大人が一番意識しなければいけないことは何でしょうか。

それは、ひたすら「待つ」ことです。

焦って子どもを無理矢理引っ張り上げようとした瞬間から、子どもの自律のチャンスを奪っていくことになるのです。ひたすら「待つ」。これがいかに難しいかはよくわかります。とくに親からたくさん手をかけられて育った人が、それと真逆の育て方をするのは相当勇気がいることです。

わかりやすいシーンとして、子どもが遊ぶ公園の砂場を考えてみましょう。砂場の近くではお母さんたちが子どもたちの遊ぶ様子を見守っています。

そこである子が、別の子からシャベルを奪って返してくれないとしましょう。奪われた子は「返してくれない」と泣き出しました。

すると何が起きるのでしょうか。

シャベルを奪った子の親がものすごい剣幕で飛んできて、自分の子からシャベルを取り上げます。そして、泣いている子とその親に丁寧に謝罪をし、「〇〇ちゃんも謝りなさい」と自分の子をきつく叱るでしょう。こうしたやり取りは日本では当たり前の光景です。むしろ、こうしたシーンで親が口を出さない方が周囲から非常識だと思われるくらいでしょう。これは、子どもの自律より仲良し主義が優先される社会の証左なのです。

もちろん、善悪の教育も大事なので、ここで完全に放任するのは難しいかもしれません。ただ、大人が介入するタイミングをもう少し遅らせたなら、どんなことが起きると思いますか。

もしかしたらシャベルを奪った子は泣き出した子を見て、しばし逡巡したあと、自分の判断でシャベルを返したかもしれません。すぐに返さなかった場合でも、後日砂場に行ったときに「〇〇ちゃんはシャベルを返してくれないから嫌だ」と言って誰も貸してくれず、自分の行いを反省するかもしれません。

いずれの場面でも、子どもは実体験から社会を学んでいくわけです。

(P164～P167より引用)

子育てで何が正解かは分かりません。我が子を愛おしく思う気持ちは、親なら皆もっているはず。何か子供にトラブルが発生したら、何はさておき真っ先に駆け付けたいものです。その気持ちは、たとえ子供が成人したとしても親ならもち続けるものだと思います。「待つ」ことは、とても難しいものです。子供の「自律」のためと理解していても、難しいものだと強く感じます。しかし、本当に愛おしい我が子の「自律」を思うなら、「待つ」ことも必要なのです。生命に関わることはすぐに対応するにしても、それ以外の場合は、工藤氏が述べるように待つ勇気をもってみませんか？

そして、それを実現するには、私たち大人が寛容の社会を築くことが必要です。たとえ間違ってもやり直しが認められる社会。私たち人間は、失敗を重ねることで成長します。子供とともに私たち大人もそれを忘れてはならないように思います。